百間川の治水施設群

岡山県岡山市　　選奨土木遺産　平成２７年度認定

岡山市街地を守り、今なお残る治水施設群

岡山市街から北東へ４kmほど行ったところに、岡山県の中心を南北に流れる旭川と百間川の分流部が見えてくる。百間川は、岡山城下の洪水被害を軽減するため、江戸時代に築造された放水路で、所々に現存する治水施設を見ることができる。

ここがスゴイ！

先人の知恵を後世へ継承し、歴史的遺構を保全・活用

1 一ノ荒手改築イメージ　2 上流巻石部（亀の甲）　3 下流巻石部（亀の甲）

4 二ノ荒手改築イメージ

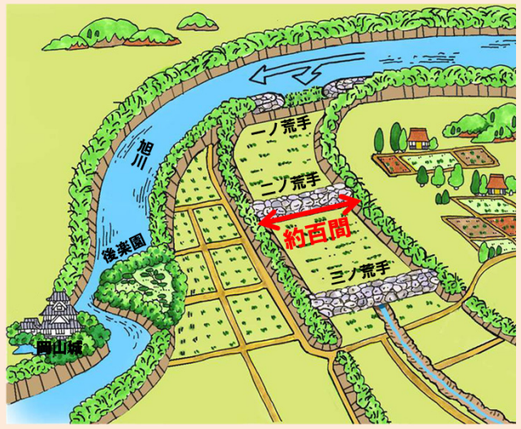
5 二ノ荒手近景

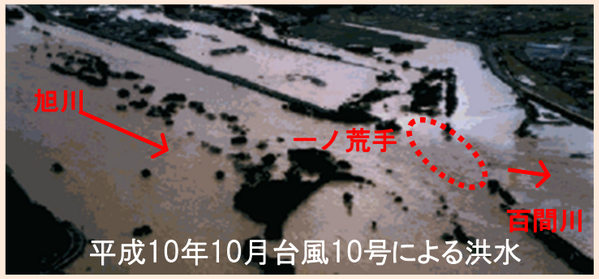
6 米田地区に現存する旧堤防

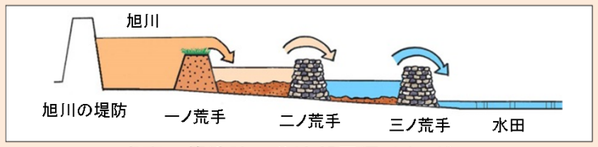
7 百間川河口大水尾（遊水池）の現状

岡山城下と洪水対策

岡山城は、旭川を堀として利用したため、水衝部の石関町付近は出水の際、激流に見舞われ、時として大きな被害も出ました。池田光政が藩主として入国した寛永９年（１６３２）以降、承応３年（１６５４）に最大の洪水被害に見舞われ、これを受けて計画されたのが百間川です。百間川は旭川左岸に設けられた荒手堤から児島湾に放流する水路で、これによって洪水時の旭川を分流させようという構想で、「三段方式の荒手」を設けています。これは、分流した百間川の水の流速を緩めると共に、流水が運ぶ土砂をそこに沈殿させる効果を考えたものです。百間川には普段はあまり水が流れておらず、いざという時には放水路として大河となります。その名称は「二の荒手」幅が百間（約１８０ｍ）あることに由来します。なお、三の荒手は明治 25 年洪水により流出したため、現存しません。







貞享の築造時の分流部周辺イメージ

「治水と開発」の両立を実現した土木技術

百間川の構想は城下の洪水回避が大きな目的であったが、洪水の流路を確保するための築堤の直接の契機は沖新田の開発であった。当時、岡山藩に仕え、様々な功績を残した津田永忠はこの発想を転換して「治水と開発」の両立という構想を立て、その実現のための工夫をしました。それが「大水尾（遊水池）」と「樋門」の結合という方法です。これは、川の河口部に樋門群を設けて、その内側に「大水尾（遊水池）」を造り、満潮の時は樋門を閉め、川水は遊水池に滞留させ、干潮を待って樋門を開き滞留した水を放流するという方法です。現在も、大水尾の旧堤防の一部が左岸側に残っています。当時の石製の樋門は河口水門の工事に伴い撤去されましたが、その一部を利用して当時の樋門の再現モチーフを河口水門の中心で見ることができます。

遺産概要

所在地：岡山県岡山市中区今在家外
構　造：一ノ荒手（練石積み：改修後）
　　二ノ荒手（練石張り：改修後）
　　米田の旧堤防（土堤+ｺﾝｸﾘｰﾄ構造物）
　　大水尾の旧堤（土堤）
規　模：一ノ荒手（幅約１４０ｍ）
　　二ノ荒手（幅約１８０ｍ）
　　米田の旧堤防（1箇所）
　　大水尾の旧堤（延長約５００ｍ）
地先名：一ノ荒手（岡山市中区中島）
　　二ノ荒手（岡山市中区中島～竹田）
　　米田の旧堤防（岡山市中区米田）
　　大水尾の旧堤（岡山市東区升田）

国土交通省中国地方整備局岡山河川事務所製作